文献紹介：幕末の異国船来琉記と当時の琉球の状況－①－

－琉球大学附属図書館所蔵沖縄関係資料から－

豊平　朝美

当館の所蔵資料の特色の一つに、沖縄関係資料資料があるが、その中に「Bull文庫」や「Kerr文庫」のような外国人の収集による沖縄関係のコレクションがある。大部分が英語の文献である。ブール文庫の寄贈者のブール師(the Rev. Earl Ranlon Bull;1876-1974)は米国のメソジスト監督教会から派遣され、明治44年(1911)から大正期の間、主に沖縄で布教活動した宣教師である。ブール師は幕末に来琉した宣教師ベッテルハイムの研究家でも知られ、同コレクションにはブール師手書きの写しによるベッテルハイム日記･書簡の他、バジルホール、ペリー提督、宣教師チャールズ・ギュツラフ師その他の外国人の航海記など約560点の多数に上る。ベッテルハイム日記については、同文庫以外に、ベッテルハイムの滞在日誌と書簡控帳等の貴重な自筆原稿が当館にある。入手の経緯は、同資料はこれまでベッテルハイムの子孫によって大事に保存されてきたが、曽孫にあたるR.J.ハンプトン夫人から琉大で研究に役立て欲しいという意向が、同夫人と交流のあった照屋善彦教育学部助教授(当時)へ伝えられ、同氏を通じて本学へ寄贈された。

16世紀頃からアジアや日本及び琉球について、西洋人による多数の航海記が書かれているが、その背景の一つとして、西洋諸国の人々がアジア諸国、日本や琉球に進出してきたことが上げられる。15世紀に西洋諸国による新航路発見と科学技術の発展にともなって、スペインやポルトガル人が東洋に進出、その後、イギリスも17世紀初頭に進出、オランダやフランスもこれに続いた。18世紀にイギリスに産業革命がおこり、19世紀には産業革命はヨーロッパおよび米国にも波及した。西洋の先進諸国は原料供給と商品販売市場を拡大するため、激しい植民地獲得競争を展開した。17世紀以降の鎖国状態の日本にも西洋諸国の人々が、キリスト教の布教や貿易を求めて来航してきた。航海記や来琉記はそういうもとで見聞した西洋人が書いたものである。

ブール文庫の内容は当館のホームページでも蔵書の一部を紹介しているが、今回はブール文庫の中からバジル・ホールの航海記を中心に、それに記載されている当時の琉球の状況を紹介したい。

外国船来琉記の文献については、須藤利一著の『異国船来琉記』(昭和49年9月発行)や最近では山口栄鉄編著の『外国人来琉記』(2000年7月発行)等で資料名とその内容を詳細に紹介している。またその他の解題については山口栄鉄編著『琉球：異邦典籍と史料』や『異国と琉球』等がある。バジル・ホール来琉記及びホールのナポレオン会見録等に関する訳文については、戦前では伊波月城(伊波普猷の実弟)、中村清二、志賀重昂、神山政良氏等が新聞に寄稿しており、須藤利一氏は『大琉球島航海記』の初版『大琉球島探検航海記』を昭和15年に単行本として出している。戦後は大熊良一訳著のナポレオン会見録に関する『セント・ヘレナのナポレオン』の和訳本が単行本として出ている。

ホールの初版は1818年にロンドンから出版され、米国でも同年フイデルフィアから出版されているが、フイデルフィア版はロンドン版に比べ、サイズも小さく、文字も小さい。フイデルフィア版は琉球島の図と本文のみで、本文に関しては両書とも内容は同じだが、ロンドン版は当時の琉球の風俗を表したカラーの挿絵が多数収録されている他、巻末にライラ号に乗船していたホールの友人、クリフォードが採集した琉球語と英語を比較対照した1,000語近い琉球語彙と118例の文例がある。この琉球語彙の収録については、ホールの著書の中で、クリフォードが琉球人(真栄平房昭、屋嘉比思次良等)から琉球語を採集していく状況が描かれている。巻末の琉球語彙は、発音をアルファベットで標記している。その表記もかならずしも正確ではない所が多いようである。例えば「Pig」(豚)のことを「Boo'ta」と標記(琉球語で「ゥワー」)したり、「Bird」(鳥)をHo'too(鳩)と取り違えているところである。このクリフォードの「琉球語彙」によって、琉

球語の見本が初めて外国に紹介された。

明治時代に、ホールの外孫、英国の言語学者バジル・ホール・チャンバレンが来日したのはこのホールの著書が縁になっているといわれている。チェンバレンは1893(明治26)年に、沖縄で1カ月間滞在して、言語、民族調査をしたが、その後明治28年にチェンバレンは「琉球語文典並びに辞典に関する試案」を出版して、琉球語を日本語の姉妹語であると断定した最初の外国人といわれている。(伊波普猷全集第8巻等参照)

クリフォードは琉球からの帰英後、琉球での布教活動を試みて、英国海軍琉球伝導協会の設立に奔走する。1843年に同協会が結成されたことにより、ベッテルハイムが宣教師として派遣されることになった。ベッテルハイムは1845年9月に家族とともに英国を出発、途中、香港を経由して1846年4月30日那覇に到着した。1854年7月に、ペリー艦隊ともに那覇を去るまでの8年間沖縄に滞在したが、王府の役人の監視による住民との接触を妨害されたことで、布教は成功しなかったが、琉訳聖書の出版など業績を残している。

山口栄鉄編著『外国人来琉記』によると、医師マクレオド著の『アルセスト号朝鮮大琉球島航海探検記』はバジル・ホールの初版より1年早い1817年にロンドンから出版されていて、同書には英国出発からの全行程を記載、琉球のことについてはゴービルが要約した中国の冊封使(中国皇帝の琉球への使者)徐葆光の著書『中山伝信録』(1711年)が引用されていると紹介している。山口氏は同書のバジル・ホールの来航の「大琉球島賛歌」と題した概説で、琉球がまれに見るほどの高度の徳義感あふれる人たちの国であり、西洋の物質文明、商業主義、重商主義の発達で急速に失われつつあった人道性を、この国が持ちつづけていることに西洋の人自身が驚きの目を向け、その事を遠洋からの訪問者たちは母国のはらから(同胞)に書きつづけた。琉球人の平和的で友情厚き民と讃歌したその琉球の民の存在を、英国はもとよりヨーロッパ全土にあまねく知らせる役を担った。英艦ライラ号艦長バジル・ホールの琉球感はロマン主義者の幻想として、後に批判を受けることになる。

大正元年(1912)9月7日から11月13日まで61回にわたって「沖縄毎日新聞」に連載された伊波月城の『ベージルホール琉球探検記』(第1章の朝鮮関係を除く)から当時の琉球の状況をかいまみることが出来る。昭和15年に出された、須藤利一氏の『大琉球島探検航海記』も同じく第2章と第3章の全訳となっている。戦後の昭和30年に出版された同氏の『大琉球航海記』は第1章の朝鮮が新たに含まれており、序文で初版の内容の不十分を補足して、訳文も平易にしたと著者は述べている。月城の訳文は廃藩置県後間もない大正初期に新聞というメディアを通して、バジル・ホールの航海記を広く紹介、大正期の沖縄で失意と貧困にあえぐ県民に勇気を与えた意義は大きいと思われる。

(つづく)

(とよひら　ともみ：図書館専門員)

左:硫黄島

バジル・ホール著
『朝鮮西部沿岸及び大琉球島
航海探検記』　1818年ロンドン版収録

右: 同書収録の琉球語彙